

令和7年度

てびま

第29号



長崎県国際理解教育研究会

巻 頭 言

長崎県国際理解教育研究会
会長 古野 祐一
(諫早市立上山小学校)

私も会誌「でじま」に寄稿した経験があります。インドネシアにあるジャカルタ日本人（平成22～24年派遣）での経験を綴ったことを覚えています。

3年間のジャカルタ生活で学んだことの中に、忘れられない言葉があります。

「慌てず、焦らず、当てにせず、しかして、飽きずに、あきらめず」

平成23年10月13日（木）付のじゃかるた新聞に掲載された、菊地輝武氏の言葉です。戦後、日伊の架け橋として活躍し、この魅力あるインドネシアで生涯を全うされた菊地輝武氏（同年10月9日に93才で御逝去）が、ここに出会う日本人に説いてきたインドネシア生活の神髄が込められています。

3年間という短いジャカルタ生活では、この言葉の真意を実感するまでに到ることはできそうにありませんが、これからも続く長い教職生活に置き換えても、殊更に励まされる味のある一文です。こうした言葉のように、ジャカルタに来たおかげで、出会えた人・もの・ことが数多くあります。…（一部抜粋）

過去と現在をつなぎ、それぞれの経験を皆で共有できる会誌「でじま」です。今回、第29号の発行ができましたのも、本誌に記事を寄せていただいた派遣中の皆様方、派遣を終え忙しい中にもかかわらず帰国報告をしてくださった先生方の御尽力の賜物です。改めて心より感謝申し上げます。

学校長崎県国際理解教育研究会では、夏の総会・帰国歓迎会、そして、冬のセミナー・壮行会を実施しています。もう一つ大きな取組が、会誌「でじま」の発行です。本誌は、当時から、全海研の全国大会や九州ブロック大会の研究報告、帰国者や派遣地からの報告に加え、本会の事業報告等を掲載しておりました。平成28年度までは、冊子として印刷し、会員や関係者に配付しておりましたが、昨年度発行の第28号からホームページへの掲載としました。海外派遣や国際理解教育に関心のある方々にも広く知っていただけるようになったことを嬉しく思います。

また、令和8年度には、「第29回九州ブロック海外子女教育・国際理解教育研究大会」が長崎県で開催されるに当たり、昨年度から準備を始めているところです。九州ブロックでは、

- ①在外施設での取組・帰国後の取組
- ②各県における国際理解教育の取組
- ③各県における国際交流・国際協力の取組
- ④を活用した授業づくり・学級づくり・学校経営

の四つのテーマで分科会を開催します。令和7年度は、九州ブロック大会に向けた準備として、再度本会の活動を見直しながら国際理解教育並びに海外子女教育・帰国子女教育・外国人子女教育について研究を深め、その充実に努めているところです。

最後になりますが、本誌の発行が、今後の本会の活動を活性化するとともに、より多くの志を同じくする方々が集う契機となりますことを祈念して、巻頭言の締めくくりといたします。

目 次

1. 帰国報告

前ホーチミン日本人学校	山口 歩	・・・・・・・・	1
-------------	------	----------	---

2. 派遣地報告

上海日本人学校浦東校	佐野 陽汰	・・・・・・・・	27
モスクワ日本人学校	下村 実加子	・・・・・・・・	31
ベルリン日本人国際学校	藤山 陽子	・・・・・・・・	35

ホーチミン日本人学校での日々
ぎゅぎゅっと詰め込みました！



東大村小学校
教諭 山口歩

Contents

▶ホーチミン日本人学校学校での教育活動について

0年目：ホーチミン前夜

1年目：「Yahoo News見たよ」

2年目： 祭

3年目： 4千万円プレイヤー

▶ホーチミン生活あれこれ

▶おわりに「アフターホーチミン」



① 首都はハノイ

② 平均年齢 31 歳

③ 昔は漢字を使っていた。現在はアルファベットに発音記号を合わせた文字を使う。

お手軽ベトナム語講座

chú ý (注意)

ý kiến (意見)

kết quả (結果)

đại sứ quán (大使館)



派遣通知から出発まで

令和3年12月末

派遣通知
手続きや研修開始

文科省・県教委・日本人学校
などとのやり取りを数多く行
いました。

4年 1月

住居の片付け開始
派遣者同士で連絡

4年 2月

学年・校務分掌など決定

4年 3月

離任式

4年 4月

出発

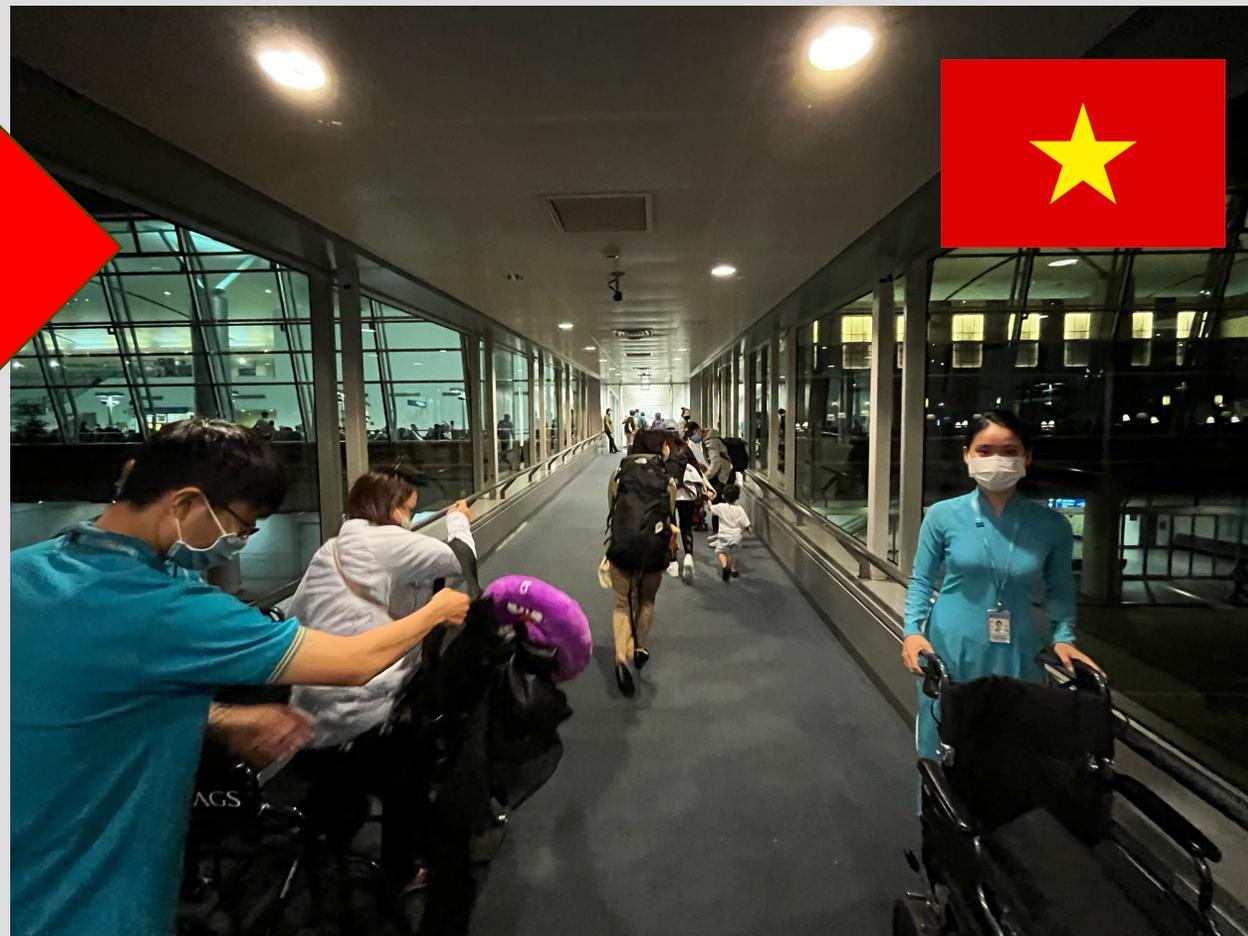
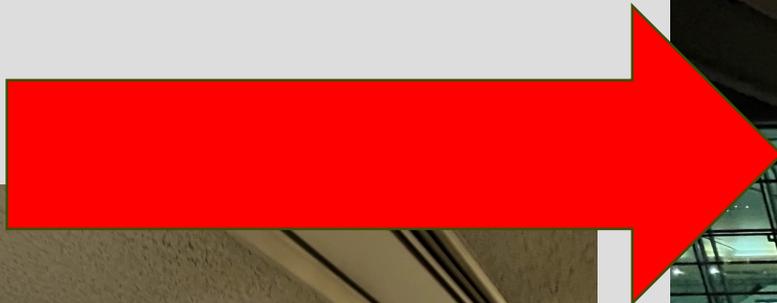
0年目



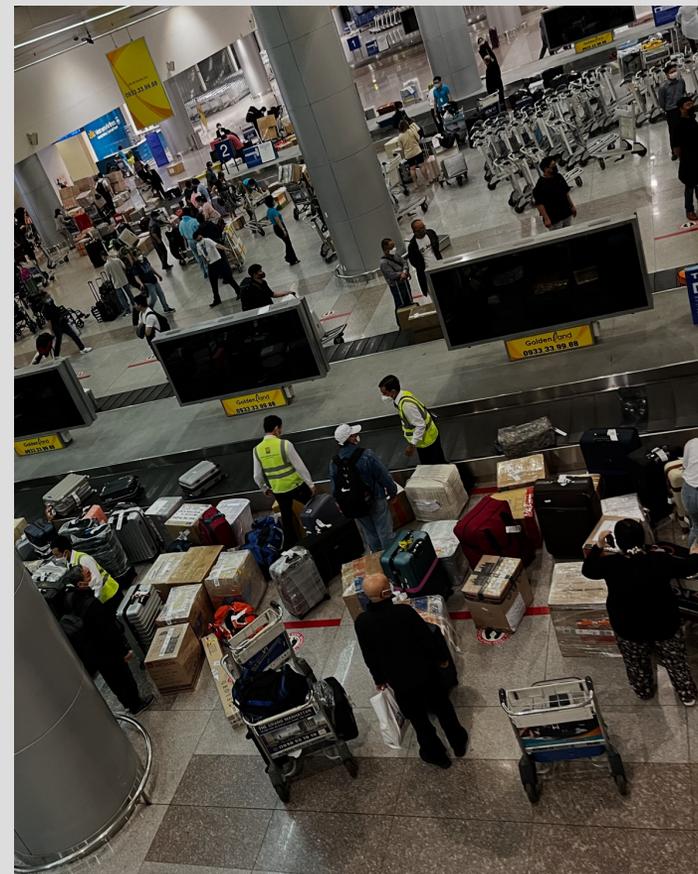
大村→対馬→ホーチミン

0年目

いざ！ホーチミンシティ



名物の空港お出迎え



1年目

戦争証跡博物館へ

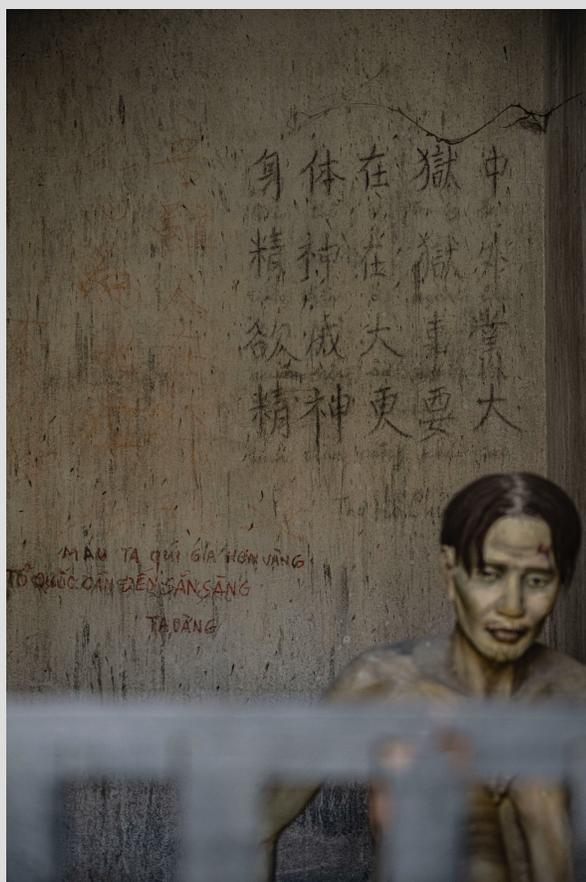


中へ入ると・・・



1年目

独房の展示



身体は牢獄の中にあっ
ても
精神は牢獄の外に在る
大きなことを成し遂げ
たいのならば
精神をさらに大きくす
ることが必要だ

日本各地の子供たちにも、 長崎で行っている平和教育を経験してほしい



ホーチミンから約4000km

1945年8月6日 広島
午前8時15分

1945年8月9日 長崎
午前11時2分

二つのまちに原子爆弾が落ちました。

	広島市	長崎市
当時の人口	約350,000人	約240,000人
亡くなった人の数	140,000人	73,884人

爆発の中心には、現在、塔が建てられています。当時この塔から2km以内の建物は、すべて爆風によってこわれてしまったそうです。

「緑のゾーン」とよばれるこの場所で、平和へのいのりをささげ、「世界はひとつ。みんなて平和な世界をつくらう」という思いをもちます。



キューバ



中国



ポーランド



ニュージーランド



ポルトガル



オランダ

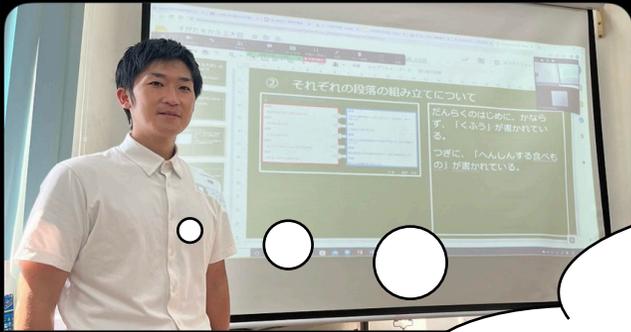
長崎の鐘

平和祈念像

折鶴の塔

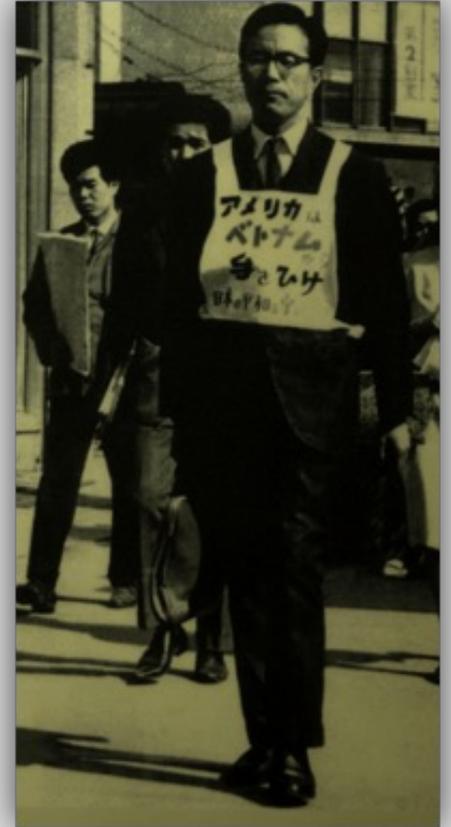
「YAHOO NEWS見たよ」

【日本人学校で平和教育 教師の山口さん (諫早出身) 児童の反応、想像以上 (長崎新聞) - Yahoo!ニュース】 日本から遠く離れたベトナム・ホーチミンの日本人学校で、平和教育を始めた教師がいる。文部科学省の事業で4月に派遣された諫早市...



news.yahoo.co.jp

日本人学校で平和教育 教師の山口さん (諫早出身) 児童の反応、想像以上



小さな力かもしれんけど、
0よりはマシ！

ホーチミン日本人学校

▶小1から中3まで およそ700名

小学部は各学年4・5クラス

校務分掌

第4学年主任

情報機器関連担当

ホーチミン祭

2年目

それぞれの分掌を振り返ってみると・・・

企画

全ては児童生徒のため

問題解決

**職員同士の
橋渡し**

700人の児童生徒

保護者

派遣教員

現地スタッフ

現地の業者

領事館



みんなで作った
ホーチミン☆祭

2年目

タブレット導入
「叩けば出る埃」のように発生する問題たち

タブレット何買うの？

予算いくら？

誰が買うの？

どうやって更新していくの？

壊れた時の保証は？

使用のルールは？

付属品何買うの？



特に痺れた「予算問題」

4000万円

1台5万円×700名＝3500万円
＋ 付属品等500万円

失敗したら洒落
にならん。



- ▶ 日本では中々ない
スケールの仕事
- ▶ たくさんの問題解決

3年目

各教科の実践もしっかり！ ～3年生 外国語活動～



フルーツの匂いを嗅いだり、動物の鳴き声を聞いたりして、クイズを考えます。

クイズの題材を探しに、動物園と市場へ

3年生 外国語活動



参観してくださる中学部
教員から、専門性の高い
意見をいただけるのも、
日本人学校ならではの。

フィリピン人英語講師とのT・T

3年間を通して

- ▶ 1年目 「小さな力でも、とりあえずやってみること」
- ▶ 2年目 「たくさんの人と一緒に協力できる喜び」
- ▶ 3年目 「未知の課題を解決する楽しさ」

多くのことを学びまし
た。

私のホーチミン生活あれこれ①

「これお願い！」と言えば、何かしら作ってくれます。



麺料理「ミーサオ」（左）
ベトナムオムレツ「バインセオ」（右）



なんといってもビア！
ローカルレストランで1本100円ちょい



私のホーチミン生活あれこれ②



ちゃっかり賞をゲット!

マラソン好きな先生たちと大会に出ることも・・・

私のホーチミン生活あれこれ③ TET HOLIDAY



グエン・フエ通りの巨大オブジェ (2023～2025)

ご清聴、
ありがとうございました。



在外教育施設派遣を通しての1年目の気づき

中国 上海日本人学校浦東校
(長崎市立三和中学校)

佐野 陽汰

①現地での特色ある教育活動

本校では、中国で学ぶという環境を生かし、中国文化理解を目的とした特色ある教育活動が継続的に行われてきた。

その一つが「現地校交流による中国文化体験」である。この活動では、中国の中学校を訪問し、現地の生徒とともに伝統文化や学校生活に関わる体験活動を行ってきた。言語や文化の違いを越えて交流することで、生徒は実際の中国社会に触れながら理解を深める貴重な機会となっていた。

また、「中日スピーチ大会」も本校の特色ある行事の一つである。本校の生徒が中国語でスピーチを行い、現地校の生徒が来校して日本語でスピーチを行うという双方向型の交流行事であり、語学学習の成果を発表する場であると同時に、相互理解を深める重要な役割を果たしてきた。

しかしながら、近年の日中関係の影響により、これらの交流活動はやむを得ず中止となっている。生徒にとって実践的な異文化理解の機会が失われていることは大きな課題であり、今後の代替的な交流方法の検討が求められている。

さらに、本校では週に1回、中国語の授業が設定されており、生徒は基礎的な語学力の習得に取り組んでいる。日常生活と結び付いた中国語学習は、生徒の現地理解を支える重要な教育活動となっている。

②現地の生活・文化体験

上海での生活は、日本とは大きく異なる点が多く、日常そのものが文化体験の連続であった。まず、支付宝 (Alipay) や WeChat Pay などの電子マネーが社会全体に普及しており、屋台や小規模店舗に至るまで現金を使用する場面がほとんどない。実際に着任以降、現金を使用する機会はなく、スマートフォン一つで決済が完結する生活の便利さを強く実感している。また、現地の人々は非常に親切で、言葉が十分に通じない場面でも丁寧に対応してくれることが多い。外国人として生活する不安はあったものの、周囲の助けによって安心して生活することができている。都市機能も整っており、交通網や商業施設が充実しているため、生活しやすい環境であると感じている。

一方で、日本との違いとして戸惑いを感じた点もある。水道水をそのまま飲むことができないことや、公衆トイレの衛生面や設備面には課題があり、生活面での適応が必要であった。しかしながら、こうした違いも現地文化の一部として受け止めること

で、比較的早く慣れることができた。実際、着任から約1か月で生活にはほぼ順応することができた。さらに、中国特有の祝日や行事も新鮮な体験であった。国慶節や春節に代表される大型連休は、日本とは異なる文化や価値観を知る機会となっている。加えて、物価が日本と比べて安い点も大きな特徴である。食費や交通費をはじめ、多くの場面でコストの違いを感じており、生活のしやすさにつながっている。現地での生活は、日本との違いを実感すると同時に、新たな文化を体験しながら適応していく貴重な経験となっている。

③違いから分かる日本の学校教育の良さ・改善点

在外校で勤務する中で、日本の学校教育との違いを強く感じる場面が多くあった。本校の生徒は、比較的教育意識の高い家庭の子どもが多く、塾に通っている生徒や進路に対する意識が高い生徒が多い。そのため、学校教育に対しても、日本の義務教育と同等、あるいはそれ以上の水準が求められていると感じた。学習面に対する期待が大きく、教師側にもより質の高い授業や丁寧な指導が求められる環境である。

また、本校では部活動が7時間目に時間割として組み込まれており、放課後の時間を教員が業務や授業準備に充てることができる体制になっている。さらに、生徒はスクールバスで下校するため学校に長く残ることがなく、教員は土日も学校業務から完全に離れることができる。この点は、日本の学校と比較して教員の働き方の面で大きな利点であり、授業研究や教材準備に十分な時間を確保できることにつながっている。一方で、こうしたシステムには課題も見られる。スクールバスの発車時刻が厳密に決まっているため、放課後に生徒と個別に関わる時間を十分に確保することが難しい。また、保護者との個別対応の機会も限られており、その結果として不登校傾向のある生徒への継続的な支援が十分に行えないという問題が生じている。

このように、日本の学校には手厚い生徒指導や保護者との密な連携という強みがある一方で、在外校のような効率的な時間管理や働き方の面で学ぶべき点も多いと感じた。双方の良さを生かした教育の在り方について、今後も考えていきたい。

④ICTを活用した実践事例

本校では、一人一台のiPad環境が整備されており、日常的にICTを活用した授業が行われている。私はロイロノートを活用し、資料配付、思考の可視化、意見共有、提出・評価までを一連の流れとして授業に取り入れた。生徒は端末操作に慣れており、調べ学習や発表活動にも積極的に取り組む姿が見られた。

本校のICT環境で特に特徴的なのは、生徒だけでなく教員にも一人一台のiPadが貸与されている点である。さらに、高性能なラップトップも整備されており、動作が速く授業準備や教材作成が非常に円滑に行える。これらの整備は、教員の業務効率化や働きやすさに大きく寄与していると感じている。

一方で、ICTを活用した授業の中身そのものは、これまで長崎で実践してきた内容と大きく変わるものではないと感じた。端末や環境が整っていても、それをどのように授業に生かすかは教員個々の力量に大きく左右される。在外校という恵まれたICT環境の中で、より効果的な活用方法を模索し続けることが重要であると考える。

⑤帰国後に実践してみたくなくなったこと

今回の派遣を通して最も印象的であったのは、中国の人々の温かさである。上海という国際都市で生活する中で、多くの場面で現地の人々に助けられ、外国人である私に対しても親切に接してくれる姿に何度も触れた。

しかし派遣前、日本では生徒や保護者、さらには教員からも「中国は少し怖い」「行きたくない」というような反応を受けることが多く、自分自身も無意識のうちにそうした先入観を持っていたことに気付かされた。実際に現地で生活してみると、そのイメージとの大きなギャップを感じるようになった。この経験から、帰国後は生徒のマインドセットを変えるような実践を行いたいと考えている。具体的には、中国での生活や人々との交流を授業や学級活動の中で伝え、中国に対する興味や理解を深めさせたい。また、実際に見聞きした事実ではなく、他者からの情報やイメージだけで物事を判断・批判することの危うさについても、生徒に考えさせる機会を設けたいと考える。在外での体験を生かし、偏った見方にとらわれず、多様な文化や人々を正しく理解しようとする姿勢を育てる教育を実践していきたい。

まとめ

在外教育施設は派遣先となる国や地域によって教育環境や生活環境が大きく異なる。上海という国際都市での勤務を通して得た経験は非常に多かったが、他地域の在外校と比較すると、さらに異なる課題や特色があると考えられる。これから在外教育を目指す先生方には、さまざまな国や地域に派遣された教員のレポートを読み、多様な実践や現地事情を知ることによって視野を広げてほしい。また、派遣前に耳にする情報やイメージだけで判断するのではなく、実際に現地で生活し、体験することで初めて見えてくることが多いと感じている。



校舎・立派な4階建てで小・中・高等学校が入っている。生徒数は約800人で日本人学校の中でも規模が多いほうである。



グラウンドと周辺の建物・浦東地区は開発が進み、周りに大きなビルも建てられ始めている。前方に見える3つのマンションには日本人の家庭が多く住んでおり、日系のスーパーやレストラン、病院・歯科医院、美容室もある。

向いたほうが前

モスクワ日本人学校
(時津町立時津東小学校)
下村 実加子

待ちに待った通知には「モスクワ日本人学校」の文字。2年間の限定で、夫を日本に残し、子ども3人を連れての一度きりの挑戦と決めて応募した。どこにでも赴任するつもりであったし、単身で子どもを連れていくことも面接で伝えていた。まさか、だった。なぜ、戦争当事国に母子を派遣させるのか、本当に歯がゆい思いでいっぱいだった。長く、長く悩んだ末に私の背中を押したのは、夫と子ども達、両親、そして「向いたほうが前」という私の友人の言葉だった。

20数年前、立ち直れないほどの挫折を味わった。もう私の未来は閉ざされたと思っていたが、そんな時に友達が私に声をかけてくれた。「実加子は今、後ろを向いてしまったと思っているでしょう？でも、向いた方が前なのよ。」彼女はマレーシア人だった。今までそんなことを考えたことがなかった。そんな考え方があるなんて。遠い異国から来た友人のその時の言葉が、今回私を再び奮い立たせてくれようとは。よし。行ってやろうじゃないか。そこで暮らす子どもたちが待っている。その子どもたちと、私の子どもたちを幸せにしてみせる。そんな思いを無理やりにももって赴任の日を迎えた。

赴任後すぐに、長崎では余裕で休校になるほどの大雪。日本の春のうららかな陽気から一転、心がズーンと沈んだ。「ああ、モスクワに来たんだな。」と。しかしすぐに、「あれ？案外いいところかもしれないぞ。」と思い始める。初めての買い出しに行ったとき、物を買すぎて途中で袋が破けてしまったら、向かいのお店から袋を手にした店員さんが走って出てきて助けてくれたし、地下鉄に乗ったら、子どものために無言ですっと席を立ち、どこかへ行ってしまおう若者たち。なんだかおもしろい模様のカラス。晴れた日にはとんでもなく高い空が広がる。平穏な毎日。そんなモスクワで生活して半年たった私の取組や感じたことなどをお伝えできればと思う。



青く、高い空

① 特色ある教育活動

コロナ禍の感染拡大、そしてウクライナ侵攻の影響により、多くの邦人が退去を余儀なくされる中、モスクワ日本人学校は実に2年半もの間、オンラインによる授業を継続してきた。教師の派遣が途絶え、教員は日本で自宅待機のまま、子どもたちと直

接顔を合わせる事の無い日々が続いた。

その長い期間、学校を支え続けたのは、現地採用の職員と、当時の校長・教頭であった。彼らの尽力により、子どもたちの学びが途絶えることなく守られたことは、特筆すべきことである。

教師派遣による対面授業が再開されたのは昨年9月であり、私が着任した今年4月は、久しぶりに教師と子どもがそろって迎える始業式となった。

長い空白を経ての再出発であり、派遣教員の中には本校での行事経験者が一人もいないという状況であった。そのため、過去の資料を参照しながら、職員一同が試行錯誤を重ね、一つひとつの行事を協力してつくり上げていくこととなった。とにかく目の前の子どもたちを見つめながら、子どもとともに過ごす日々を大切にすることというところが本校の特色と言ってもよいと思う。2年半もの間、教師がいなかったのである。子ども達は教師との時間、そして友達との時間を待ちわび、大切に感じている。その思いに応えなければならない。また、いつか侵攻が終わり、邦人がいつでも安心して戻ってこられるように学校の歩みを止めないということ意識しながら、日々の教育活動を進めている。

だが、日々の教育活動でもこの国ならではの状況を感じる。他の国ならば、もっとたやすく生活科での町探検や現地校との交流などができるのであろうが、私たちは「非友好国」の学校であるため、それも制限される。そんな中でもお互いの町や人の良さを知ろうとする学習内容を工夫しているところである。

またモスクワ日本人学校は少人数にもかかわらず、歌声が響き渡る学校である。校歌を高らかに歌い、友との別れの日には心を込めて別れの曲を歌い、学習発表会では瞳を輝かせながら自分の役割を果たし、友の頑張りに惜しみない拍手を送る。その姿からは、互いを認め合い、支え合う温かい雰囲気が感じられる。

人数が少ないからこそ、一人ひとりの存在が大切にされ、誰もが欠かせない仲間として関わり合う。子どもたちはその中で、自分の力を生かす喜びや、友とともに成し遂げる達成感を味わっている。この「認め合う文化」は、本校の大きな特色であり、私自身が学ばされることの多い点である。

② 現地の生活

モスクワでの暮らしは、想像していたよりもずっと温かい。人々は一見無表情で不愛想に見えるが、実際には優しさに満ちている。地下鉄では、子どもを見かけるとすぐに席を譲ってくれる人が多く、荷物を持って困っていると、どこからともなく手を貸してくれる。買い物中に「日本人です」と伝えると、にこやかに歓迎してくれる人もいる。異国での生活の中で、人の温もりに触れる瞬間がいくつもあった。

母一人で子ども三人を連れての赴任。決して容易ではないが、その分だけ自分の「母親力」が確実に上がっている気がする。どんなに忙しくても、弁当だけは手を抜

かないと決めている。慣れない土地で頑張っている子どもたちにとって、昼食の時間は小さな楽しみであってほしいからだ。日本と同じような食材が手に入りにくいのが、工夫しながら、できる限り日本の味を届けている。週末は、家族でできるだけ出かけるようにしている。モスクワの高い空や、美しい並木道、どこまでも続く大地の広がり、子どもたちの感性を豊かにしてくれているように思う。

子どもたちも、この環境の中で確実に成長している。長男は「自分の役割をちゃんとわかっている」と日本の祖父母に話したらしい。父親が日本にいる分、家族を支えるという思いを胸に抱いているようだ。次男は道がわからなくなると「聞いてくる！」と言って、ロシア語と身振り手振りで人に尋ねに行く。三男はときに寂しさを見せながらも、いつも明るく、家族の雰囲気を和ませてくれる。

家族でのモスクワ生活は、日々が挑戦の連続でありながら、その分だけ深い喜びと学びがある。子どもたちのたくましさを支えられ、私自身が新しい生き方を学んでいる。

また、一番不安に思っていた安全面についてだが、今のところ恐怖を感じたことがない。しかし、ここは外国でありロシアであるということはいつも忘れずに生活をしていかなければならないと思っている。



すごい速さでレジを通していく、スーパーのおばちゃん。優しい笑顔がうれしい。

③ モスクワの教育現場で

モスクワで教育活動に携わる中で、日々考えることが大きく2つある。一つ目は、小学部と中学部の指導法の違いである。こちらでは中学部の「自主性」を重んじる傾向が強く、教師があえて細かく指示をしない場面も多い。その姿勢は、子ども自身が考え、判断し、行動する力を育てるうえで大切なものである。一方で、小学生にとっては、整列の仕方や始まりの合図を待つ姿勢など、基本的な生活習慣や集団行動の型を学ぶ段階が必要であると感じる。

また、行事の際にも、教師が子どもたちに寄り添い、声をかけ、努力の方向を共に確認していくことで、「頑張るとはどういうことか」「自分の力を出し切るとはどういうことか」を体験しながら理解していくことも多いだろう。そうしたかかわりを通してこそ、子どもの主体性や自己肯定感が育つのだと改めて感じている。

自主性・主体性を育てることはもちろん大切であるが、その前段階として、基礎となる姿勢や型、そして「支え導く大人の存在」も欠かせない。子どもたちが安心して自分の力を発揮できるように、段階に応じた指導の在り方、そしてそのつなぎ方を見つめ直していく必要があると感じている。

二つ目は、これまで長くオンライン授業が続いていたこと、そして超少人数であることから、子どもたちには「協同的な学び」の経験が乏しいことである。そのため、授業では意識的に子ども同士が関わり合いながら学ぶ時間を大切にしている。

まず、教師自身が子どもの「協同者」となることを心がけている。問いに向かって一緒に考え、悩み、発見する。その姿を見せることが、子どもたちにとっての「ともに学ぶ」モデルとなるからだ。

また、数人しかいない中でも、子どもたちが自分の考えを開き合い、友達の意見と比べながら考えを深めていけるようにしている。発表を聞いて反応したり、話し合いの中で新たな気づきを得たりするなど、日本の学校と変わらない学びの展開を意識的に取り入れている。

少人数ゆえに、子どもたちの考えの種類や気づきはどうしても限られる。しかし、それを教師からの新たな問いや示唆で補い、深めることで、限られた中でもしっかりと45分間考え続けられる授業をつくろうと努めている。

こうした積み重ねの中で、子どもたちは次第に友達の考えを受け止め、自分の思いを伝えようとする姿を見せるようになり、少人数ならではの丁寧で濃密な学びが実現できるようになると考えている。

④ 終わりに

モスクワに来て半年が経過した。この経験は私の人生にとっても、家族の人生にとっても必ず「前」になるようにしなければならない。そしてここに来たからこそ出会えた子ども達の日々に少しでもよりよい影響を与えたい。学びの楽しさ、友と過ごす時間のすばらしさ、教室の温かみ、そのようなものを感じさせ、日々の暮らしが心豊かなものになるようにしたいと思っている。また、この経験を経て帰国した際には、再び出会う子供たちに同じ思いを届けたい。そして、異国での生活や活動を経て得た気づきを生かし、子どもたち一人一人が自分の力を生かし、認め合える学校づくりに一役買える存在になりたい。



夏休みにモスクワに来てくれた夫。日本とモスクワでお互いに家族として思いあいがら、今を精いっぱい頑張っていく。目の前の息子たちと、学校の子どもたちのために。

発見!ベルリンとベルリン日本人国際学校の魅力

ベルリン日本人国際学校
(諫早市立高来西小学校)

藤山 陽子

1. 現地での特色ある教育活動

私は、2025年度よりドイツ連邦共和国にあるベルリン日本人国際学校に勤務しています。本校は、児童生徒数18名の小規模学校です。児童生徒は、非常に明るく、何事にも積極的に全力で取り組み、互いに助け合う心を強くもっています。



また、小学校においても教科担任制を取り入れており、主要教科は単式学年で、技能教科は複式学年で学習をしています。小規模校ならではのよさを生かした教育活動を数多く行っています。中休みや昼休みには、小学生と中学生が一緒になってドッチボールやバレーボールなどをして遊んでいます。学習面では、体育を全校体育として実施し、種目に応じて近隣学年でチームを組んだり、縦割り班で活動したりするなど、バラエティーに富んだ形態で取り組んでいます。さらに、すべての学校行事を全校で行っているため、上級生のよい手本を見て下学年の意欲が高まったり、下学年に対して上級生がアドバイスを行ったりするなど、学年間の関わりを通じた刺激のある取り組みがなされています。

加えて、グローバル人材の育成を目指し、小学1年生から英語とドイツ語の授業を行っています。11月の学校祭では、全校児童生徒によるドイツ語劇を披露するなど、言語学習の成果を発表する機会も設けられています。

さらに、本校の現地ならではの特色として、現地校と交流活動を積極的に行っています。例えば、運動会には、50名を超える現地の子どもたちが自主的に来校し、競技に参加してくれました。また、7月には、グスタフ・ハイネマン校との2日間にわたる交流活動を実施しました。初日には、高学年以上の児童生徒が、日本の学校における教科や行事について英語でプレゼンテーションを行ったほか、全校児童生徒で演舞を披露したり、共に遊んだりするなど、交流を深めました。一方で、次の日には高学年以上の児童生徒がグスタフ・ハイネマン校を訪問し、英語やドイツ語を用いて交流するなど、非常に楽しく貴重な時間を過ごしました。



その他にも、さまざまな学校行事において、現地校の児童生徒が見学に来たり、参加したりする機会を設けるなど、現地校との交流を大切にしています。



その上、本校では教育課程の中に、博物館や動物園、公共施設で学ぶ校外学習をはじめ、夏季学校、現地のプールを借りて行う水泳教室、ベルリンミニマラソンへの参加とそれに向けた練習、オペラワークショップとクリスマスマルクト体験、スケート教室、2年に1回の修学旅行など、ベルリンという立地を生かした、ここでしか実施できない特色あるカリキュラムが数多く編成されています。

また、ベルリンやドイツ国内で活躍されている日本人のダンサーやピアニスト、スポーツ選手など、専門性をもった方が来校し、講演やワークショップを行ってくださる機会もあります。海外で活躍されるまでの道のりや努力、専門分野に関する貴重なお話を直接聞くことができるだけでなく、踊ったり歌ったりするなど、共に体を動かしながら活動することで、表現することの楽しさやすばらしさを全身で味わうことができます。

さらに、本校は、大きなオフィスビルの1階部分を校舎として使用しており、体育館や校庭はありません。そのため、限られた環境の中でも、子ども達が体験を通して学べるよう、様々な工夫をしています。体育館や運動場は近くの施設を借りています。屋上には花壇があるので、今年の低学年は生活科の植物の成長を観察しながら、命の大切さや育てる楽しさを感じることができました。中学年以上の学年では、理科や学級活動の時間を使って、トウモロコシやカボチャ、ブロッコリー、ジャガイモ、サツマイモ、花などを栽培しました。

今年は天候にも恵まれ、作物はどれも元気に育ちました。収穫した作物は、調理して味わったり、家庭に持ち帰ったりし、「育てること」と「食べること」がつながる、実感のある学びとなりました。

私は、9か月間ここベルリン日本人国際学校で勤務する中で、現地の方々との意思疎通や、予定通りに進まない状況への対応、急なカリキュラム・マネジメントを求められる場面など、さまざまな困難があり、次々と対応すべき場面はありますが、それら一つ一つを含めて、ここでしか味わうことのできない、非常に価値ある経験をさせていただいていると実感しています。



2. 現地の生活・文化体験



ドイツの首都であるベルリンは、ドイツ北東部に位置しています。ドイツで最も人口が多い大都市でありながら、自然と都市が共存している点が大きな魅力です。夏になると、公園でくつろぐ人々の姿が多く見られます。また、ベルリンは分断と統一という重い歴史を経験し、それを乗り越えて発展してきた都市です。そのため、街の至るところに歴史的な足跡が残されており、散歩をしながら歴史を感じることができます。さらに、

博物館や美術館が多く、音楽も街にあふれているため、芸術を身近に体感できる魅力的な都市です。

ベルリンの交通機関は非常に発達しており、バス・地下鉄・都市近郊電車・路面電車が整備されています。そのため、車がなくても市内のほとんどの場所へ行くことができます。また、自転車専用レーンも多く、自転車で移動する人もたくさんいます。ベルリンには、約 370 万人が住んでいます。移民や外国出身の人が多くことが特徴で、自由で多様な価値観を大切にする雰囲気があります。そのため、服装や生き方も自由で、「自分らしく生きる」ことが尊重される都市として知られています。

文化体験としては、ドイツならではの行事があり、4月の赴任直後にはイースター祭を体験しました。イースター祭は復活祭とも呼ばれ、ドイツではクリスマスと同じくらい大切にされているお祭りの一つです。この時期には、学校や仕事が休みになり、町や家は卵(おもちゃ)や花、うさぎ(おもちゃ)などで飾られます。また、本学の低学年児童も、授業の中でこの文化体験を取り入れていました。

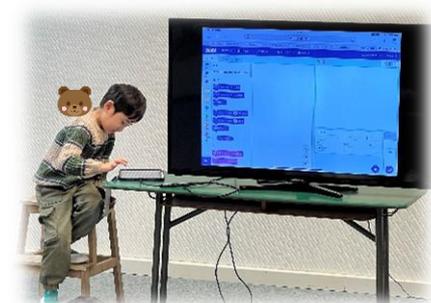


冬になると、日照時間が短くなり、曇りの日が続きます。それでも、気持ちが明るくなるような工夫がされており、12月に入ると、セント・マルティン祭やセント・ニコラウス祭、クリスマスマルクトなどの楽しい行事が続きます。

どの学年も積極的に現地の行事や文化を取り入れた授業が行われ、学校で学んだことを家庭に持ち帰って、家族でお祭りやお祝いに参加するということが多々あります。これらの経験は、私たち教員にとっても児童生徒にとっても大変価値あるものだと思うので、これからも続けていきたいと思っています。そのためには、現地の文化を知ることが前提なので、ネットやポスター、現地の人たちから情報を集めたりして、教員で共有していくことを大切にしています。

3. ICT を活用した実践事例

本校では、一人一台端末を活用した ICT 教育を日常的に行っています。児童は、調べ学習を通して必要な情報を集め、Google スライドを使ってプレゼンテーションを作成することで、表現力や発表力を高めています。また、Pages や Google ドキュメントを活用して学習内容をまとめたり、意見交換を行ったりすることで、協働的な学びを深めています。さらに、スクラッチを用いたプログラミング学習や、Canva を使った表作りなど、創造的な活動も積極的に取り入れています。ICT を活用した教育は必須であり、これからまだまだ拡大していくと思います。しかしながら、私は、まだ ICT 活用の幅は十分ではないので、今後さらに、新しいアプリや教材の活用方法を開拓し、児童生徒一人ひとりに最適な学習を提供できるよう努めるとともに、協働的な学びをさらに充実させるために研鑽を重ねていこうと思っています。



4. 帰国後に実践してみたくなったこと

ICT を活用することで、児童生徒一人一人の理解度が向上するとともに、意見交換が容易になり、学習意欲の向上にもつながりました。ICT はあくまでも目的ではなく、学びを深めるための手段です。ICT を活用した学習環境は、主体的・対話的で深い学びを支える上で有効であると考えます。そのため、日本の小学校においても、様々な教科と ICT 教育を関連付けながら、児童生徒一人一人が安心して挑戦できる学習環境を整えた授業づくりを進めていきたいと考えています。



最後に、ICT だけでなく、ここで得られる貴重な経験を通して、帰国後には長崎県の学校教育の発展の一助になれるよう力をつけていきたい。